

公立夜間中学とは ～「来てくれてありがとう」の中学校～

松戸市立第一中学校みらい分校

1 全国初の開校

松戸市立第一中学校みらい分校は、旧古ヶ崎南小学校の校舎を活用し、教育機会確保法の施行後全国初の夜間中学として、平成31(2019)年4月に開校した。夜間中学の開校自体が全国でも22年ぶりであり、さらに県内では唯一の公立中学校の分校である。すべてにおいて前例がないため、昨年の開校から試行錯誤で教育活動を進めている。

2 ここで学ぶ生徒

みらい分校では、夕方になると、毎日こんな生徒たちが「こんばんは」と言いながら校舎に入ってくる。

- 家族の夕食作りや、家事を終えてから、勉強しにくる生徒
- 勤務先やアルバイト先から、急いで登校してくる生徒
- 今日の仕事が残業となったため、遅刻して登校してくる生徒
- 片道2時間近くかけて登校してくる生徒（千葉県内の松戸市以外の方にも入学資格があります。）
- 生まれた国が当時紛争状態等で、十分な教育を受けられなかった生徒
- 育った国での学校教育が9年未満だったため、高校入試を受けられなかった生徒
- 中学時代は不登校で、進学先を決められなかったため、高校進学を目指している生徒
- 中学を不登校等で過ごし、高校には進学したが、退学してしまった生徒

これらの生徒は、午後5時20分までに登校し、1日4時間の授業を受ける。途中夕食休憩をはさみ、午後8時45分に下校する。学習指導要領に定められた全ての中学校の教科・領域に加え、松戸市独自教科「言語活用科」も受ける。

現在学ぶのは、学齢期を超えた10代から70代で、約半数は40代以上である。また、中学校を卒業できなかった生徒、あるいは卒業していても不登校等の理由により学び直しを希望した生徒でもある。日本国籍の方が約7割だが、他にも5か国の生徒が学んでいる。

生徒は、様々な事情や思いを抱えながらも、本校での学びを求め、自ら希望して入学してきた。共通しているのは、「学びたい」「未来を変えたい」という気持ちである。学習意欲は高く、毎日真剣に勉強している。学校としては、生徒全員の事情や心情を理解し、「来てくれてありがとう」の気持ちで、丁寧に寄り添うことをモットーとしている。

3 先に生まれていない先生がいる学校

ここでは、教える教員よりも年上の生徒が何人もいる。「先に生まれたから先生」ではなく、それぞれの教員の人間性や、教科の専門性によって先生になる学校である。

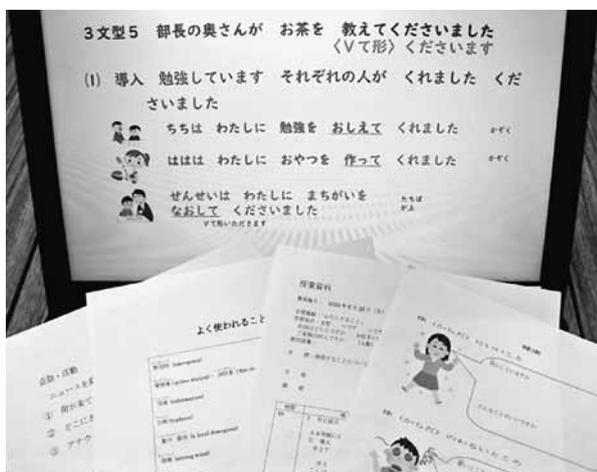
本校では、就労し社会人経験を持つ生徒も多く、年齢や学習歴が様々であるため、教科書はそのままでは使えない。さらに、国からも特別の教育課程が認められているが、中学校学習指導要領が想定している発達段階を超

えた学習者が対象という特徴がある。また、全国的に確立され、準拠できる夜間中学のカリキュラムも存在しない。そのため、学校としては、学習指導要領に基づきながらも、何をどのように、どこまで教えるか、生徒の実態に応じて独自に設計する必要がある。

昨年本校を視察した方から、「ここでは、目の前の生徒のために授業を組み立てていますね。」と仰っていただいた。生徒の状況に合わせた丁寧な教育活動を評価していただいたと感じている。

4 6コース別の日本語指導

外国籍の生徒以外にも、日本国籍だが海外で育った生徒など、授業で話される日本語に不安のある生徒を対象とした日本語指導を実施している。希望した生徒は、週8時間の日本語指導を受けている。個々の生徒の日本語能力に応じて、六つのコースに分け、文法項目を系統的に指導している。また週に1回「聞く・話す」内容を重視したグループ形式での日本語指導も取り入れている。担当する本校の教員に加え、松戸市の日本語指導スタッフが指導法に工夫を凝らしながら教えている。それぞれのコースで使用する教材は、パワーポイント教材等、生徒の実態に合わせ、教職員で毎回作成している。(下写真例)



さらに、学校行事などの教育活動は日本語を中心に説明するため、日本語指導が必要な生徒でも、日本語で理解しなければならない。そのため、「わかりやすい日本語を使えるようにすること」を全職員の研修テーマとした。



日本語授業風景
(録画した緊急地震速報を見て、聞きとれた内容を話す)

5 生涯教育と学校教育の新たな融合点としての可能性

文部科学省は、夜間中学が少なくとも各都道府県に1校は設置されるよう、その設置を促進している。この国の方針や地域の状況により、今後夜間中学を新設していく県もある。昨年度は全国30以上の教育委員会や組織等から約250人の視察や取材があった。新規に開校した本校は、夜間中学におけるパイオニア的存在であるため、ここでの教育実践が、これから他県で新設される夜間中学のスタンダードになっていく可能性がある。今後もフロントランナーとして、常に挑戦と改善を続けていくことは、本校の使命だととらえている。

開校後、社会人でもある本校の生徒に対し、「本当に必要な中学校の教科内容とは何か」と検討を重ねてきた。今後も見えてくる課題をクリアし、公教育による学びのセーフティネットの役割を果たせるよう、更なる教育活動の充実を目指していきたい。